

嶋満神社便り

令和元年九月号（第三十号）

発行 嶋満神社奉賛会

本年度の例祭も無事終了

今年も当嶋満神社の例祭が去る八月十八日（日）、吉坂の岩室稻荷社、森本宮司様の手により厳かに執り行われ、無事終了いたしました。

宮司様も息子様に代替わりされ、新しい時代を託す希望の例祭となりました。

またいつもながら奉賛会員の方々にはご多忙中、大変ご苦勞様でした。またたくさんのお供えもいただき、ありがとうございます。

さて、今年で三年目の「おみくじ入り福餅授与」ですが、今年はお参りの方を増やすべく、おみくじのみの販売も行ってみました。結果は残念ながら参拝者を増やすまでには至りませんでした。何か魅力的な方法を考えたいとは思っていますが、まずは奉賛会員の方々に於かせられましては率先してお参り、またご近所の方をお誘いいただき、おいでくださいますようお願いいたします。

続、カミモホトケモ

前号ではちよつと難しい「神仏習合」、についての記事を素人のくせに厚かましくも書かせていただきましたが、これに関してかなり明快な知識を提供してくれている本を読みました。

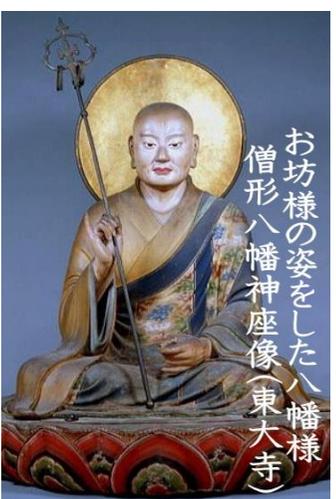
「神も仏も大好きな日本人」島田裕巳著 筑摩書房 です。

それによれば今現在のように「神社は神社、お寺はお寺」とはつきり分かれた形になったのは明治維新の神仏分離令以降、たかだか百五十年前から（本書では執筆が十年前なので百四十年となつています）、それ以前、仏教伝来以降の千五百年間というものは、神様も仏様もわが国民はごちやませに信仰してきました。

神社の敷地内にはこれを守護する「神宮寺」が

作られ、お寺の境内には守護神を祭る神社が勧請されました。そもその初めは伊勢の多度神宮寺の縁起に書かれた神託に見られます。神様曰く「自分は罪を犯して神の身となったので、この状態から逃れるために仏に帰依したい」と。

びつくりですね。本誌前号では「仏教をもとに国造りを進めたい時の政権の意向が働いた」と述べましたが、ここにまさにその匂いがかぐことができます。



お坊様の姿をした八幡様
僧形八幡神座像（東大寺）

ただそんな話が民衆にすんなり受け入れられた背景には、神道にはないが、仏教にはあるもの：「救済論」が大きく影響したのでしょう。仏教ではどうすれば人は救われるのか、あるいは極楽浄土へ行けるのかを明確に説いています。神道にはそれがありません。

本誌第二十三号で述べたように、もともと神道には祭殿も何もなく、「開祖も、教義も、救済もなかった」（神道はなぜ教義がないのか：島田裕巳著）のですから。

時代を経て各神社はそれぞれ「〇〇にご利益のある神社」などと呼ばれるようになりましたが、当時はそんなことだったのでしよう。

仏教には他にも神道と結びつくことで利点がありました。お寺の内や浄土を模した庭園などは表現しきれない「神聖性」を神社の神域に見出した、と島田裕巳氏は言います。

明治になってこの形は大きく変わります。

政府によって神様と仏様は完全に分離され、天皇家は国家の祭祀を司る神主の役割を担うこととなります。神様は「国家神道」となり、先の「時の政権の意向」が完全に逆転したのです。私たちが宗教に対して持っていた「ずっと続いてきた伝統」という概念は、実は明治以降の百五十年間のものだった、というところで今回は終わりにしたいと思います。